

J. D. サリンジャーの 『ライ麦畑のキャッチャー』と 「秘密の金魚」

野 依 昭 子

Synopsis: Although J. D. Salinger's style and values were radically altered after the end of World War II, he writes little about his own extensive war experiences in his sole novel *The Catcher in the Rye*. Salinger, in fact, took part in five major battles during the European War, and the end of the war, helped liberate a Dachau concentration in German. Honorably discharged, he then worked as a civilian contractor with the US Defense Department, serving as an intelligence agent and bringing local war criminals to justice at the Nuremburg Trial. Critics attribute Salinger's reluctance to write about his experiences to trauma he suffered during and immediately after the war.

However, this paper asserts that Salinger did write about the war in his still widely read novel, *The Catcher in the Rye*, although without alerting his readers to the war's presence. Employing the unique literary techniques, namely heteronyms, reversing what's being spoken of and using a word to stand in for an identical word with a different meaning, Salinger manages to write about the war for his own sake. He calls his work "The Secret Goldfish," the name of the short stories protagonist Holden Caulfield's brother D. B. has supposedly written.

This paper aims to decode *The Catcher in the Rye* and illustrate how Salinger actually did write about the war in his famous novel.

I. 「秘密の金魚」と「戸棚の中でのピアノの演奏」

J. D. サリンジャー (J. D. Salinger) の彼の第二次世界大戦の体験は人生観のみならず文学観や創作スタイルを著しく変えたと思われながら、彼の代表作の『ライ麦畑のキャッチャー』(*The Catcher in the Rye*, 以下『キャッチャー』)には彼の戦争体験が僅かしか書かれていない。彼は本国での軍事教練後、第4兵師団の一兵卒として連合軍によるノルマンディー上陸後、ヨーロッパ戦争の主要な戦闘の全てに参戦、1945年4月にドイツ国

内にあるダッハウ強制収容所での囚人を解放などの体験を経て、5月8日に終戦を迎えたが、戦争疲労症の為ニュルンブルグ病院に入院し、その後、米国軍から名誉ある除隊をした。サリンジャーが自らの戦争体験について寡黙であった理由は、ほとんどの批評家は、彼が戦争によるトラウマから小説化出来なかったと説明する¹。

サリンジャー自身も或る箇所「自分は絶対戦争作家にはならない。かつてはそうなりたかったのではあるが²」と書くが、続けて「作家にとって唯一可哀そうな時は、書かない時だ」と書くように、これまでの自分の価値観を根底から覆すような戦争体験を全く書かないという事はある得なかったはずである。その相矛盾する気持ちを自分自身の為に書くことによって解決しようとしたのではないだろうか。本論は、その思いをサリンジャーは『キャッチャー』の中で「秘密の金魚」(“The Secret Goldfish”) (1-2) と名付けている、と主張する。「秘密の金魚」とは『キャッチャー』の冒頭で語られる、ホールデンの兄 D. B. の短編集の物語の一つで、幼い男の子が自分の金魚を誰にも見せないのは自分のお金で買ったからという他愛もない話である。しかし「金魚」(goldfish) には “goldfish in a bowl” と言うように、「世間の目に晒された」という含意があるのを知れば、「秘密の金魚」はサリンジャーが死と生の限界状況の経験を、世間に身を晒さずに自分だけの為に書いた作品の比喩だと思える。彼が子供の世界を殊の外好み、童謡や童話からしばしば作品の主題や題名を採っていることから、本論のタイトルに敢えて「秘密の金魚」を用いた。

サリンジャーはそのことを違った例でも述べている。それはホールデンがニューヨークのグリニッチ・ビレジにあるアーニー (Ernie) のピアノバーに行った時の出来事で、アーニーの演奏がほとんど神格化されたような雰囲気の中で、ホールデンだけが彼の演奏は大袈裟でわざとらしいと感じ、また客達の彼に捧げる熱烈な賞讃もウソッパチだと貶す。ホールデンは「もし僕がピアノプレーヤーか役者か、なんでもいいけど、この馬鹿な連中が僕を素晴らしいと思うなら、僕はイヤだね。拍手さえしてはしくない。人はたいてい間違った理由で拍手するんだ。もし僕がピアノプレーヤーなら、戸棚の中

で隠れて弾くよ」(84)と言う。サリンジャーは「戸棚に隠れてピアノを演奏する」や「秘密の金魚」という表現で自らの為だけに戦争を書こうと宣言しているのであろう。本論は、サリンジャーがどのような技法を用いて自分の目的を達成しようとしたかを解き明かしてみるつもりである。

II. 詩 的 技 法

ホールデン・コーフィールドの物語は単なる隠れ蓑ではなく作品自体で完結している。事実、この作品は十代の物語の古典として 60 余年の歳月を君臨してきている。そしてこの物語に比類のない魅力をもたらしめているのが当時のニューヨークの街の鮮やかな描写である。十代の少年の物語を書きながら、その一方で戦争を書くのにサリンジャーはどのような技法を用いたのであろうか。小説という散文に、自分だけの為とはいえ戦争を言及するのには、詩の形式が一番ふさわしかったと思える。サリンジャーが優れた詩人であったかは別にして、詩を好み、詩の創作に励んだという事実は、『ニューヨーカー』の詩部門の批評家の、サリンジャーが戦場から毎日のように詩を投稿してきたという証言からも分かる。彼自身、物語「マヨネーズ抜きのサンドウィッチ」の後書に、自分の描く戦争は「心震えるようなメロディー」のようなものだと書いている。⁴つまり彼の書く戦争は首尾一貫した粗筋をもつような内容ではなく、断片的な言葉の羅列のようなものである。その代わり彼は言葉を推敲し、吟味し、その言葉が持つ多義性を用いて詩の特性である比喻や隠喩を創り出して作品に戦争を書き込もうとする。その際、サリンジャーは読者を全く無視するわけではなく、キーワードの繰り返しやイタリック(往々に両方)でもって読者の注意を引き、彼らの想像力をかきたて、戦争が書かれていることを感じさせるよう努めている。本論は、どのような技法が組み合わされて、少年の物語と戦争の在り様とが一つの作品に共存しているのかを解説してみる。

Ⅲ. 「逆さまゲーム」

本論はサリンジャーが用いた創作技法の一つを「逆さまゲーム」と呼ぶ。「逆さまゲーム」とは言葉通り、何であれ一つの言葉とまったく違った、または反対の言葉を言うゲームであるが、本論はこの用語をイタリアの小説家アントニオ・タブッキ（Antonio Tabucchi）の短編集『逆さまゲーム』から借りている。『逆さまゲーム』の訳者須賀敦子は後書きに「反対側に立つことによってタブッキは私達が日常、こうに違いないと思いこんでいることを、ぐるりと裏返しに見せ、そのことによって、読者はそれまで考えてもみなかった裏側に気づき、新しい視点の自由を獲得することになる」（376）と書く。事実、タブッキは思いがけない状況の変化や二面性の開示を僅かな言葉で見せてくれる。サリンジャーも同様にありふれた言葉でもって異なった二つの世界、すなわち十代の少年が彷徨するニューヨークの街と戦場の在り様が同時に描いている、と本論は主張する。サリンジャーがその技法の影響をタブッキから受けたのではないが、敢えて本論が「逆さまゲーム」という言葉を用いるのは『キャッチャー』に仕掛けられた二面性を解説するのが容易という便宜性のためである。

作品中、最も頻繁に繰り返される言葉“phony”は『キャッチャー』の看板文句であろう。公民権運動の華やかかりし 1960 年代の米国の若者達はこの“phony”という言葉でもって全ての既成体制を「偽善」または「インチキ」と決めつけ、否定したと言っても過言ではない。しかしこの言葉は第二次世界大戦が勃発した頃、しばしば他の意味でも用いられた言葉でもある。1939 年から 1940 年の 5 月までの間の第二次世界大戦は“phony war”（「まやかし戦争」）と呼ばれた。その理由は連合軍と独軍が互いに攻撃らしい攻撃をせず、戦争など存在しないような雰囲気だったためである。そのように戦時中にも“phony”という言葉が使われたが、戦後の若者達は“phony”の言葉の意味を、ホールデンが憎んだ「偽善」とか「わざとらしさ」のみに取ったのである。村上春樹は「この作品の語りは米国の 50 年代固有のものであ

る」(62)と言うが、必ずしもそうではない。この作品が1951年に出版されている為、サリンジャーは読者を1950年代の若者と想定し、彼らの言葉使いに気を配ったとは思われるが、同時に戦時中に使われた言葉も使っている⁶のである。

他にも作品中、4度、繰り返される言葉“duck”がある。ホールデンはセントラル・パークの池が凍ったためにそこから飛び立てないアヒル(duck)のことを心配する。彼の優しさを物語るが、“duck”という言葉が第二次大戦において米軍の水陸両用トラックを意味することを知ると、水陸両用トラックに乗って戦場のヒュルトゲンやアルデンヌの森の中の凍った河や運河を前進する兵士達の姿が浮かび上がってくる。

戦争を仄めかす言葉は他にも繰り返される。例えばホールデンがペンシー校を去る前に訪れたスペンサー先生は、「人生はゲームである」という意味で、“Life being a game”(8)や“Life is a game”(Ibid.)という言葉繰り返す。幾度もその言葉が繰り返されると、英語圏の人間はこの言葉に似た成句、すなわち“War is a game”⁷を思い浮かべるのではないだろうか。サリンジャーは繰り返しの技法で読者の脳裏に潜在する成句を思い起こさせようとしたと思える。そして“War is a game”に「逆さまのゲーム」を当てはめると“Game is a war”となる。事実、この物語はホールデンが校庭のトムンセンの丘からペンシー校とサクソン・ホール校とのフットボールのゲームを見下ろしている場面から始まる。そうなるとそのゲームは連合軍とドイツ軍との戦闘の比喻とも取れる。それも1944年12月16日、ドイツ軍の攻撃で始まったバルジの戦いである。この戦いはドイツ軍の敗北が色濃くなった1944年の末、ヒットラーが不退転の決意で命令した反撃である。ドイツ軍が米軍の固守していた西部前線を突破してベルギー領内まで進軍したためにバルジ(突出)という名称を持つのだが、米軍の交通網の拠点バストーニュを包囲したのである。一方、米軍は悪天候の上、クリスマスを前にして戦況が変わらないと油断した為に、ドイツ軍の不意打ちの攻撃に対して退却を余儀なくされた。しかしドイツ軍が12月22日に米軍に対し降伏を要求した時点には米軍はヨーロッパの各地の駐屯部隊を招集して態勢を立て直

し、総動員でドイツ軍の進攻をくい止め、バストーニュを死守した。一方のドイツ軍は燃料補給が絶たれて敗走するが、両軍にとって 23 日からの三日間の戦いは剣ヶ峰であった。

ではなぜバルジの戦いがスペンシー校とサクソン・ホール校とのフットボール・ゲームと見なされるのかと言うと、バルジの戦いはクリスマスの祝日を挟んだ週末が連合軍とドイツ軍との勝敗を決定する重要な時であったが、『キャッチャー』もクリスマス前の土曜日から始まり、共にクリスマスを週末に挟んだ三日間に展開する話であったからである。

そして何よりもサリンジャーがこの戦場で危うく命を落しそうになり、短期間ではあるが消息不明になっている。サリンジャーの任務が諜報活動であったために、彼の分身である D. B. が「自分はカウボーイのような将軍を司令車に乗せて運転していただけた」(140) と諧謔的に言うように、通常、肉薄戦には加わらなかった。しかしバルジの戦いでは、米軍の動員が手薄であったためにコックや衛生兵、そしてサリンジャーのような諜報兵までも武器を取って戦ったのである。スペンサー校の全校生が応援していると書かれているのはそのことを仄めかしている。

またホールデンはスペンサー先生に暇乞いをしに行くのに気が進まなかったが、ふと「10 月のある日、校庭で僚友のロバート・ティチナーやポール・キャンベル達とボールを投げあった」(4) ことを思い出し、「もしあのような情景を思い出すことがあれば、どんな暇乞いも必要とあれば出来るであろう」(*Ibid.*) と言う。この箇所は激戦で有名なヒュルトゲンの森の戦いを仄めかしていよう。というのはその戦いが 9 月から始まって 12 月の初めまで続き、この戦場で米軍は少なくとも 3 万 3 千人の死者と捕虜を出したと言われている。この箇所で繰り返される “ball” の「球」の意味が転じて「弾丸」となり、弾丸が飛び交う戦闘を示唆していよう。同様に繰り返される “good-by” はこの戦場で命を失った戦友との惜別を物語り、永久の暇乞いと取れよう。事実、この作品には “good-by” が非常に多く繰り返される。

そういう観点から見ると、この作品には「死」を暗示する言葉が夥しく書かれているのに気付く。村上春樹と柴田元幸は『キャッチャー』の中で “It

killed me”とか“**It nearly killed me**”と言うように、“**kill**”という言葉が頻繁に使われているのに注目し、前後の文脈から「まいったね」とか「笑っちゃうよね」と訳さざるをえないと言う（110）。事実、妹フィービー（**Phoebe**）のキュートな振る舞いをホールデンはしばしば“**She killed me**”と言うが、それは「彼女の可愛さにかかったらお手上げだ」と訳されよう。しかし文脈から外すと“**kill**”は文字通り「殺す」という意味になる。また“**drop dead**”は俗語として「くたばれ」と訳されるが、「殺す」という意味もある。また“**shoot bull**”も幾度となく繰り返され、「ほら話をする」と意識されるが、逐語的には「撃ち殺す」という意味にもなる。そして作品には自殺を意味する“**commit suicide**”や“**jump from the window**”という言葉も多く見られる。事実、エルクトン校の生徒が窓から投身自殺した挿話書かれるが、ホールデンがこれらの言葉を発する場合は「死にたくなっちゃったよ」とぼやきのような意味で使われる。しかしサリンジャーは軍隊や戦場で、またニュルンベルグの戦争犯罪人収容所で多くの自殺を目の当たりにしたはずである。『キャッチャー』と同じ頃に書かれた短編“**The Perfect Day for the Banana Fish**”や、その後続く *Franny and Zooey* や *Raise High the Roof Beam, Carpenters/Seymour: an Introduction* には主人公シーモアの「自殺」が通奏低音として流れている。

言葉の繰り返しのみならずモチーフの繰り返しを「逆さまゲーム」に当てはめると、さらに戦争の惨状が見えてくる。例えば作品中に古代エジプトの埋葬方法が二度言及される。最初はスペンサー先生が声高に読んだホールデンの歴史の試験答案で、もう一つはニューヨークの自然歴史博物館でホールデンと幼い少年達との会話においてである。ともにエジプト文明の素晴らしさは、死者を埋葬する際に用いる様々な薬草によって死者の顔が何世紀にも渡って腐敗されないのに、現代の科学では到底それらをなしえないという内容である。何故、古代エジプト人の死者の埋葬方法が戦争と関連あるかと言うと、スペンサー先生が「我々は11月4日から12月2日迄エジプトについて勉強した」（11）という言葉にある。この期間にサリンジャーの属していた第4師団がヒュルトゲンの森での熾烈な戦いに従事し、その戦闘では

膨大な数の戦死者が戦場にうち捨てられた事実である。その年の北ヨーロッパは54年ぶりの寒さの為、戦死者の遺体の多くは春の雪解けまで葬ることができなかった事実である。二つの挿話を通して、サリンジャーは大義の為に死んだ兵士達に埋葬という人間の最小限の尊厳を許さなかった軍隊の非情さに悲憤し、古代エジプト人の方が現代人よりもはるかに賢明で、かつ文明的だと言いたかったのであろう。彼が遺体の顔の損傷に拘るのは、ドイツ軍がヒュルトゲンの森の木の枝に仕掛けた爆弾が炸裂して、兵士の体や顔が木端微塵になったことに心痛めていることを物語る。

『キャッチャー』の中で書かれる史実は僅かであり、また漠然と表される。バルジの戦いは「去年のクリスマスの事だった」(1)とか「震えあがるような寒さである」(3)と書かれ、またヒュルトゲンの森の戦いは「10月のある日」(4)とか「我々は11月4日から12月2日迄エジプトについて勉強した」(11)としか書かれていない。後は読者が想像力と感受性によって解説すべきと言わんばかりの提示の仕方である。事実、家庭でもサリンジャーは殆ど戦争のことを話さなかった、と娘のマーガレットは言う。それでもたまに話す際、彼は大概、一言で全てを語るような言葉、例えば「わかるだろう、ノルマンディー上陸の時がどんなだったかを」(64)というような言い方をし、後は相手の想像力に任せるような形で話したという。しかしサリンジャーは読者の想像力や感受性に余り信を置かなかったことは、ホールデンの「人から僕が年相応に振舞えよと言われる時はうんざりするんだ。時には僕だって年以上の振舞いすることだってあるんだ—ほんとに。でも人は全然気がつかないんだ。人は何にだって全然、気がつかないんだ」(9)という言葉からも察せられる。彼は読者が彼の創意に気づかないことを望んでいたのかもしれない。

IV. 異名 (heteronym)

戦争を語る際に日付と共に必須なのは人名であろう。サリンジャーは登場人物に「異名」(heteronym)を与える手法を使っている。「異名」とはボル

トガルの詩人フェルナンド・ペソア（⁸**Fernando Pessoa**）が名付けたものであるが、詩や散文の中での人物に二人以上の異なった国籍、生い立ち、人格を付随させる技法である。ペソアの「異名」の手法は決して彼固有のものではなく、昔から実践された手法であり、ガートルド・ステインの『アリス・トクラスの伝記』はその一例である。彼女はパートナーのトクラスの口を通して自分の考えや思い出を語るという形式を取っている。またミハエル・バフチンの「ポリフォニー論」は一つの発話に二つ以上の声が込められているという意味で「異名」に近い発想である。しかしペソアの「異名」は徹底しており、一人の人間の分裂した内面や矛盾した発話ではなく、全く別個の生い立ちや人格を持つ異なった人物を一人の人間の中に創り出すという技法である。そういう観点から、『キャッチャー』の登場人物に他の人物が描かれているのを説明するのは、ペソアの「異名」が一番ふさわしいと思われる。いかにサリンジャーが「異名」という手法を思いついたかを考えると、彼が芝居に精通していたことであろう。年少の頃からブロードウェイで上演される芝居に馴染んでいた故に、役者が手薄の場合に一人二役やそれ以上の役を演じることもあれば、一人の役者が二役以上の役を演じることに芝居の面白さがあるということも知っていたに違いない。ペソアは「詩人はふりをするものだ」(10)と端的に定義するが、メアリー・マッカーシーは「サリンジャーが自分の声を腹話術的技法で他者の声に変えるのに長けている」(46)と言うように、ホールデンも状況に応じて偽名を使い、その人物のふりをする。サリンジャーが物語の主人公にそのような人物を作り上げたのは、「異名」の技法を十分に発揮するためだと思われる。

(1) アーニー：ピアノ奏者

作品中、「異名」の一番わかりやすい例はアーニー（**Ernie**）であろう。ホールデンがニューヨークのピアノバーを訪れた際、そこで弾いていた人物である。彼の勿体ぶった弾き方や、わざとらしい謙虚さをホールデンは“**phony**”だと言うが、この人物はアーネスト・ヘミングウェイ（**Ernest Hemingway**）と考えられる。アーネストの愛称は「アーニー」であり、家

族は彼をそう呼んでいたし、友人のある者は「パパ」と呼ばずに「アーニー」と呼んでいた。『キャッチャー』にはヘミングウェイを言及している箇所が他にもある。兄の D. B. がホールデンにヘミングウェイの『武器よさらば』を「ほんとうに素晴らしいから」(141)と勧めた場面である。何故、小説家としてのヘミングウェイを書きながら、同一人物をアーニーというピアノ奏者としても書いたかという、サリンジャーは、読者が一つの作品に違った名前と同じ人物が描かれているとは想像しないと見越したからであろう。そしてヘミングウェイの様々な面を描くためには、一つ以上の視点が必要だったのである。作品を語る際にはヘミングウェイの名前を出し、彼の人間的な性向を描く場合にはアーニーという名前を用いたと言えよう。

サリンジャーとヘミングウェイの関係は両者が戦争に赴く迄、何の接点もなかった。ヘミングウェイは文学の巨匠であり、サリンジャーは無名の小説家であった。しかし戦争が二人の関係に思いがけない局面をもたらした。サリンジャーの属する第4歩兵隊がノルマンディーに上陸し、パリ解放に従事していた頃、ヘミングウェイもパリのホテル・リッツに滞在しているのをサリンジャーは知り、彼を訪ねたのが最初の出会いである。ヘミングウェイがヒュルトゲンの森の中の農家を本拠地に使っていた頃、サリンジャーは彼を訪ねており、酒を酌み交わし、文学について語りあった(112)、と同行した戦友ヴェルナー・クリーマン(Werner Kleeman)が証言する。その後も、ヘミングウェイがベルギーのルクセンブルグのホテルで、毎晩ジャーナリストや将校達と梁山泊のような集まりをしていた際、サリンジャーも常連の一人だった、とヘミングウェイの弟のレスターは証言する。それ故、サリンジャーのヘミングウェイ宛の手紙の「あなたと会って話したことがこの戦争で唯一楽しかった時です」はたんなるお追従ではなかったはずである。事実、ヘミングウェイが自殺した直後、サリンジャーはクリーマンに彼の死にふれて、「覚えているだろう、ヒュルトゲンが大変だった時、我々はあの小さな家にいた時のことを？彼(ヘミングウェイ)の優しさを思いだす。君もきっとそうだと思う。」(284)と書いている。しかしヘミングウェイに対してそう思い、かつ口にしなが、一方ではアーニーの姿を借りて、ヘミング

ウェイの肥大した自己欺瞞や俗物根性を書くのはサリンジャー自身が偽善者ではないだろうか？ この矛盾をホールデンとホールデンの異名と見なされる D. B. にそれぞれのヘミングウェイ像を語らせることによって、サリンジャーは解決している。つまり戦争に行った D. B. はヘミングウェイの悪い面を語らない。D. B. が勧めた『武器よさらば』をホールデンが“phony” だと言った時、彼は気を悪くしたような表情をし、ホールデンがあの本を理解するには未だ早いと言う。また D. B. はしばしばアーニーのバーに行き、時折、ホールデンを連れていったと書かれている。つまり D. B. とアーニーとは親しい関係だということが語られているのだ。一方、若さ故に純粋に物を見、率直に口にすることが出来る利点とともに、ヘミングウェイを大局的に見ることが出来ない未熟さを 17 歳のホールデンに帰することで、ヘミングウェイに見られる俗物根性や偽善を語らせているのではないか。D. B. のヘミングウェイに対する態度もホールデンの彼に対する酷評も共にサリンジャーの胸の裡にあり、異名がそれらを表すのを可能にしている。

そして異名は、時の推移とともにヘミングウェイが作家として変容していくのも表している。最初、ホールデンはアーニーのわざとらしさを痛罵しながらも、「彼の演奏は素晴らしい」(84) と言うが、アーニーが演奏を終えた時には、“In a funny way though, I felt sort of sorry for him when he was finished.” (*Ibid.* 下線部は筆者) と言う。この文は「おかしいことだが、彼が演奏を終えた時、僕は彼に一種の同情を覚えた」と訳されよう。しかし下線部は本来 “he finished his performance” であるか、または “he finished it” と書かれるべきで、原文の “he was finished” ならば、彼は「終わった」か「再起不能」という意味になる。ヘミングウェイが 1950 年に発表した *Across the River Into the Trees* は、彼が満を持した第二次世界大戦の小説であるが、この作品をほとんどの批評家は失敗作と見なし、ある評者はこの作品でもって「彼は終わった」¹⁰とさえ言った。この言葉をサリンジャーは用いたのではないか。終わったのはアーニーのピアノの演奏ではなくヘミングウェイの作家生命ではないか。次に続く一文「彼はもはや自分が

正しく弾いているのかどうか分かっているとは思えなかった」(*Ibid.*)は、ヘミングウェイが作家として錯乱していると言いたかったのだと思える。ヘミングウェイは『キャッチャー』を読んだと言われている。彼はアーニーが自分の事だと分かったはずである。はたして彼は自分がシャーウッド・アンダーソンやスコット・フィッツジェラルドに同じことをしたのを思い出したであろうか。

(2) スペンサー先生

スペンサー先生はペンシー校の歴史の先生であるが、ホールデンの彼に対する態度に親愛の情も見られるが、「おいぼれ」と馬鹿にした言葉も吐き、彼のスペンサー先生に対する態度は曖昧である。しかし「スペンサー先生」の異名が第二次世界大戦の「大立者」であるとなると、ホールデンの矛盾する態度が理解できる。名前“**Spencer**”に二重名の“**Churchill**”を付けると、フルネームは“**Winston Leonard Spencer = Churchill**”になる。サリンジャーはスペンサー先生の特徴を挙げ、彼の異名が第二次世界大戦の総責任者の英国首相チャーチルであることを表そうとする。その第一が「歴史」である。スペンサー先生は歴史の先生であり、「歴史に夢中」(11)な人物と描かれるが、チャーチルは軍人であり政治家でもあったが、同時に戦争の思い出を数々の『回想記』に書いた歴史家でもある。その功績で1953年にノーベル文学賞を受賞している。次に挙げられるのは彼の高齢であろう。ホールデンはスペンサー先生を常に“**Old Spencer**”と呼ぶ。彼はしばしば人々を呼ぶ際、名前の前に“**old**”を付け加えており、そのニュアンスは様々であるが、スペンサー先生の場合は親愛の情と「年寄の」という意味が相半ばしていよう。チャーチルは第二次大戦が勃発した時、既に66歳であり、対するヒットラーが55歳であったため、彼の高齢は顕著だった。そしてスペンサー先生はホールデンをベッドのある書斎に招じるが、チャーチルも彼の首相官邸の部屋には寝室と浴室が据えられ、そこで日に2時間は昼寝し、入浴し、要人にもバスローブのまま会っていたと言われている。それ故、スペンサー先生が着古したバスローブを着、胸をはだけてベッドに座っている

様子を見るのはゾットする、とホールデンが言うのはそのことを指しているのである。またスペンサー先生の手許に雑誌 *The Atlantic Monthly* が置かれている事は、米国が1941年12月7日に参戦するまで、独力では英国が到底勝ち目がないと見越したチャーチルは米国が参戦するようルーズベルト米国大統領に説得する為に、再三大西洋（the Atlantic Sea）を渡ったことや、大西洋間を往復した両者の書簡が1700通以上あったのを指しているであろう。スペンサー先生がこの雑誌を落としたり、取り損なったりするのをホールデンは“**He missed it again**”（5）と繰り返し言うのは、チャーチルの戦争での指揮が幾度となく失敗だったことを指しているよう。この作品において、スペンサー先生に身をやつしたチャーチルの役割が何であったかという、立場上、彼が多く的人物に会っており、その一人がホールデンの異名だという仕掛けである。

（3）ホールデン・コーフィールド

ホールデンは物語中に様々な偽名を使い、その幾つかは便宜上のものもあれば、異名を仄めかす名前もある。兄 D. B はホールデンの異名の一つである¹²。本論は紙数の都合で、ホールデンの異名の一人として奇想天外の人物だけを挙げ、その人物について論じてみたい。その人物とはニューヨーク行きの夜汽車で出会った級友の母親に名前を訊かれた時、ホールデンが名乗った「ルドルフ・シュミット」（**Rudolf Schmidt**）（54）である。サリンジャーが読者の推察できる範囲を考慮して作った異名であろう。「ルドルフ・シュミット」は英語圏の名前としても通るが、一般的にはドイツ系の名前である。チャーチルは第二次世界大戦の回想録に、彼が出会った幾人かのドイツ人の中で「ルドルフ・ヘス」（**Rudolf Hess**）について、異例の長さで書いている（43-49）。本論はこの人物「ルドルフ・ヘス」がホールデンの異名の一人と推定し、論じてみる。

ヘスは今でこそ忘却の人であるが、戦時中、彼はヒットラーの副総統であり、ヒットラーに献身的に仕えた腹心である。その彼が、英国とドイツが交戦中の1941年5月10日、ドイツ国内の飛行場から単独で飛行機「メッサ

ーシュミット 110 (the MS 110) を操縦し、スコットランドのグラスゴー近郊まで飛行し、パラシュートで牧草地に落下し、近くに住むダグラス・ハミルトン伯爵の許に連れて行くよう、救助した農夫に頼んだのである。このニュースはドイツや英国のみならず世界各国にも報道され、事件の異常さに人々は驚愕したという。もしヘスがホールデンの異名だと仮定するならば、何故、サリンジャーはヘスを主人公の異名の一人にしたのであろうか。当時、この事件のニュースがセンセーショナルに伝えられ、小説の題材として面白いと見なしたのかもしれない。またサリンジャーは戦後、ニュルンベルグ戦争裁判での犯罪人の宣告文を書く仕事に携わった際、ヘスの裁判を傍聴する機会を持ち、彼に興味を覚えたからかもしれない。しかしそれ以上に彼の心を強く動かしたのは、ヘスが自らの行為の動機を説明した一文を読んだからではないだろうか。この一文は英国で逮捕されたヘスが英国政府に提出したものであるが、ドイツと英国との和平を望んでいるヒットラーの真意を忖度して、和平交渉の呼びかけを自分の責任で行ったと言明、更に彼はこの試みが無謀と自覚しながらも敢えてこの行為を推し進めた動機を次のように弁明する。

I had continually kept before my eyes the vision of an endless line of children's coffins with weeping mothers behind them, both English and Germans; and another line of coffins of mothers with mourning children. (*The Peace of Mission*, 14)

自らの行動の動機を幼い子供たちの棺の行列と彼らの死を悼む母親達の行列の姿が目浮かぶ光景に帰す、というヘスの一文は十分に感動的である。しかし世界規模の複雑な政治や経済が絡んだ第二次世界大戦において、このような単純で感傷的な理由で和平交渉の提案が出来るものであろうか。もしヘスが本気ならば、彼は“crazy”である。そしてこの“crazy”こそがヘスを論議する際の焦点となる言葉である。というのはスコットランドへの飛行前、ヘスはヒットラー宛の手紙に、自らの行為を説明した後、「もしこの可

能性の少ない企てが失敗に帰すなら．．．貴方は全ての責任を否定し、私が“crazy”であったと言ってください。」(27)と書いている。そして彼の飛行の3日後、ドイツ政府は「ヘスの行動は狂気の故」と発表している。彼と面会したチャーチルはヘスを狂人とは見なさず、「英国がソ連と連立せずにドイツと和平を結ぶことを、ヒットラーが望んでいるのをヘスは付度し、彼は自分自身の責任で来たのだが、そこにある種のヒットラーからの使者としてのニュアンスがあるように感じた」(49)と回想録に書いている。ただし同じ箇所、ヘスを戦争犯罪人ではなく精神病人として扱うべきとも言っている。一方、ヘスを狂人とは見なさず、戦争犯罪人として即刻、処刑されるべきだと主張したのがソ連である。スターリンを始めとするソ連の首脳は、ヘスの行為を英国とドイツが和平の裏取引が露見した事件と見なした。その証拠にヘスの飛行の10日後にドイツはソ連との不可侵協定を破棄し、6月20日にはドイツ軍はソ連領への侵入を開始したことを挙げる。事実、ヘスの行動に様々な憶測がなされ、国際的な政治陰謀についての論議はいまだに結論を得ていないが、本論はあくまでもヘスがホールデンの異名であることと、『キャッチャー』における彼の必然性を検証することに専心する。

ヘスの前述の文と対照されるのは、ホールデンがフィービーに自分の将来を語った箇所である。ホールデンは次のように言う。

“Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody's around—nobody big, I mean— except me. And I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start go over the cliff—I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out from somewhere and catch them. That's all I'd do all day. I'd just be the catcher in the rye and all. I know it's crazy, but that's the only thing I'd like to be. I know it's crazy.” (173 下線部は筆者)

ヘスの一文と上記の文を比べれば、この文ははるかに練られており、描かれるイメージも鮮やかで読者に強い印象を与える。しかし二つの文は共に子供達が危険に晒されている状況を物語る。ヘスの場合は、戦争で命を失った子供達の葬儀の光景であり、ホールデンの描く光景は、崖縁に誰からも守られずにいる子供達の姿である。ヘスもホールデンも共に無力な子供達を救いたいという願いを持つ。しかし彼らの使命感は余りにも現実離れしていることも共通し、ホールデンが言うように“crazy”である。上記の文中に“crazy”という言葉が三度繰り返されているが、物語全体にも“crazy”や同意語の“mad”が頻繁に記されている。これはヘスが受けた数限りない「“crazy”か否か」の精神鑑定を受けたことを仄めしているのかもしれない。またサリンジャー自身も戦争後遺症でニュルンベルグの病院に入院中、医者から「crazy か否か」と問診されたことをユーモラスにヘミングウェイに書いており、他人事ではなかったかもしれない。文中の下線部“the catcher in the rye”は作品のタイトルであるが、その“catcher”という言葉に「逆さまゲーム」を用いれば“caught”になり、「捕まえる人」ではなくて「捕まえられた人」である。“Hess was caught in the rye field in Scotland”である。ロバート・バーンズの“If a body meet a body coming through the rye”はスコットランドの愛唱歌であるが、言葉遊びの好きなサリンジャーはヘスの事件に絡めて替え歌を楽しんだのかもしれない。

次にヘスの飛行機からの落下は“fall”と呼ばれるものだが、『キャッチャー』において、“fall”が逐語的と比喩的な意味が共に使われているのに気づく。ヘスは彼の妻イルゼに飛行機が低下し、彼は失神（passed out）し、その後、意識を取り戻した時点で機体からパラシュートで飛び降り、足に軽い打撲傷を負っただけで、無事にスコットランドの農地に墜落した、とその時の状況を手紙に書いている（35）。同様に『キャッチャー』にもホールデンが失神する場面がある。その描写は「トイレ」という意味の“can”さえ除けば、ヘスが落下した状況と酷似している。

When I was coming out of the can, right before I got to the door, I

sort of passed out. I was lucky, though, I mean I could've killed myself when I hit the floor, but all I did was sort of land on my side. It was a funny thing, though. I felt better after I passed out. I really did. My arm sort of hurt, from where I fell, but I didn't feel damn dizzy any more. (204 下線部は筆者)

ホールデンが失神した場面は物語の展開には何ら意味がなく、ヘスの墜落に辻褃合わせただけのものと思われる。そしてホールデンが庇護を求めて訪ねたアントリーニ先生の言葉, “I have a feeling that you're riding for some kind of a terrible, terrible fall.” (186 下線部筆者) や “This fall I think you're riding for —it's a special kind of fall, a horrible kind.” (187 下線部筆者) での下線部 “ride for a fall” は「自ら危険を招くようなことをする」という意味だが、アントリーニ先生の言葉は、ホールデンが将来、甚だ危険な生き方をすると言わんばかりである。さらに「君を脅かすわけではないけれど、僕にははっきり目に浮かぶんだ。何か高邁だが無意味な大義のために君が雄々しく死ぬのが。」(188) という文が続くが、これらの言葉は庇護を求めて来た 17 歳の少年には大袈裟で不適當である。しかしヘスの行状の説明であれば理に適っている。

ホールデンは、フィービーや他の子供達が回転木馬に乗り、手を伸ばして金の輪を取ろうとして木馬から危うく落ちそうな光景を見ながら、「落ちる」ことが死を意味する場合であっても、子供達は自分の気持ちの赴くままに行動した方がいいのだという考えに至る。ここでホールデンは彼の異名であるヘスとは同一人物ではなくなり、ヘスに対して共感こそすれ、客観的な対象として見ている。いやホールデンがフィービーに無実の人を救う弁護士ならなってもいいと語った時点で (221), 彼の意識は既にヘスを救済する側にあったかもしれない。¹³

サリンジャーはヘスのドンキホーテのような生き方に共感を覚えている。フィービーが乗った回転木馬は古くておんぼろだが、『キャッチャー』の第一版の表紙には怒り狂った雄々しい赤い馬が描かれる。¹⁴ この表紙の絵に、ヘ

スが妻イルゼ宛の手紙に自分の行状の釈明の代わりに引用したゲーテの詩劇『エグモント』の一節「疾走する時代の馬に乗って、翻弄されながらも突き進む」(38)のイメージは甚だよく似ている。ヘスは、愛国心故に処刑されたが、後に彼の志が実を結んでオランダ独立の道筋を作ったオランダの英雄ラモラル・エグモント伯爵(1522-1568)に自らを同一視したようである。そしてホールデンの唐突な言葉「次の戦争の時には、僕は原子爆弾の先端に乗って行くぞ」(141)はエグモント伯爵やヘスの行為に呼応したものであろうか。少なくともサリンジャーはヘスの純粋な騎士道的精神に、自分自身や犬死のように亡くなった戦友達の姿を見出したのかもしれない。事実、物語の終わりにホールデンは「わかっていることは、僕はみんなが懐かしい」(214)と言い、悪口ばかり言っていた寮生のストラドレーターやアックレイですら懐かしい、と付け加えている。彼らは寮生であり戦友でもあったのだ。サリンジャーはこの物語を彼の母に捧げている。しかし彼はこの物語を戦死した戦友にも捧げているのである、というのはホールデンの最後の言葉“Don't ever tell anybody anything. If you do, you start missing everybody”(214 下線部筆者)は「誰にも何も言うな。そうでないと誰でも恋しくなってしまうから」と逆説的に友への惜別が書かれているからである。但し最後の頁に“miss”という言葉が3度繰り返され、そのうちの一つはイタリックで書かれているのに気付くと、文中の“missing”は「懐しむ」だけではなく「失う」という意味にも取れる。すなわち文の最後の言葉“everybody”を“everything”に置き替えると、この文は「誰にも何も語るな。そうしないと全てを失うから」と「秘密の金魚」の主旨を述べているとも取れよう。

注

¹ 概ね、批評家はサリンジャーが自分の戦争体験を書かなかった理由を戦争によるトラウマと見なしているが、Andy Roger は、「ホールデン・コーフィールドは疎外された十代の少年よりも、戦争で傷ついた兵士に共通点を持つ」という言葉や、また「サリンジャーは直接、戦争の事は書くことが出来なかったので、戦争とは関係のない人物や状況を選び、『疎外』という普遍的なテーマで一般読者から承認を求めた

のである。それによって自分の経験や考えが表われ、精神分析者や愛国的な世間の介入からも自由になるからである」という言葉は、本論の主旨と同じくする。(Salinger. David Shields and Shane Saleruno) p.261.

² Irwin Shaw の評論 “If You Write About the War” (『サタデー・レビュー』 (Feb. 17, 1945) の主旨「作家が可哀そうなのは戦争に行かなかったことだ」へのサリンジャーの反論 “Sorry for Writers?” (『サタデー・レビュー』 Aug. 4, 1945.)

³ A letter from Louis Bogan to Elizabeth Frank. (Salinger. David Shields and Shane Saleruno) p.130.

⁴ “Backstage with *Esquire*,” *Esquire*, Oct. 24, 1945.

⁵ タブッキの『さかさまゲーム』(Il gioco del rovescio) は 1983 年にイタリア語で出版されており、サリンジャーが彼から影響を受けたことはありえない。

⁶ David Lodge は「サリンジャーの観点は戦前か、または戦時中のもの」と言う。(TLS June 13, 1975)

⁷ 英国の詩人 William Cooper の詩 The Task (v. 187) の一節である。彼の詩が平易なため英語圏の成句になったのが多い。

⁸ ペソアはポルトガル語による詩集 *Message* (1934) を出版したのみで、一生、無名であった。近年、彼の特異なスタイルが注目を浴び、ポルトガル代表的詩人と見なされている。

⁹ Leister Hemingway, (*My Brother Ernest Hemingway*. Weidenfeld and Nicolson) p.264.

¹⁰ Maxwell Geismar や Chandler Brossard の発言。(Fame Became of Him. John Raeburn) P.125.

¹¹ ヘミングウェイの秘書、後に三男 Gregory の妻 Valerie Hemingway は 1959 年ヘミングウェイからこの本を貰ったと証言。(Salinger. David Shields and Shane Saleruno) p.112.

¹² 村上春樹と柴田元幸はホールデンの兄弟達が彼の分身であり、同時にサリンジャーの分身でもあると主張する(『翻訳夜話 2 サリンジャー戦記』文藝春秋, 2003) p.111. 村上兄 D. B. の名前はサリンジャーの “J. D.” をもじったものと言うが (p.39), 筆者は球技の後衛守備 “Defense Back” の頭文字を取ったものと推察する。サリンジャーの軍務がそうであったし、ホールデンを後ろから守る役という意味が込められている。

¹³ 1959 年 12 月、サリンジャーは *New York Post* にニューヨーク州の終身禁固刑者の待遇改善について投稿している。おそらく彼はドイツのシュバンダウ刑務所に収容されているヘスの終身刑の境遇に思いを馳せた故と推察する。

¹⁴ 挿絵はサリンジャーの友人 Michael Mitchell が描いたもので、サリンジャーはこの絵を非常に好んだと伝えられる。(Salinger, David Shields and Shane Saleruno) p.255.

引用文献

- Churchill, S. Winston. *The Second World War*. Vol.III *The Grand Alliance*. London: Cassell & Co. Ltd. 1950.
- Kleeman, Werner, with Uhlig, Elizabeth. *From Dachau to D-Day: A Memoir*. NY. C., Rego Park: Marble House Editions, 2006.
- Hess, Ilse. *Prisoner of Peace*. translated by Meyrick Booth ed. by George Pile with the foreword to the English Edition by Air Commodore G. Oddie. London: Britons Publishing Co. 1954.
- McCarthy, Mary. "J. D. Salinger's Closed Circuit" *Harper's*. 225 (October 1962).
- 村上春樹 柴田元幸. 『翻訳夜話 2 サリンジャー戦記』 東京：文藝春秋, 2003.
- Pessoa, Fernando. 『ペソア詩集』 澤田直訳編. 海外詩文庫 16. 東京：思潮社. 2008.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown, 1951.
- . "JFK Library to show Salinger's letter to Hemingway." Jul. 27, 1946. Web. Mar. 25, 2010.
- Salinger, Margaret A. *Dream Catcher A Memoire*. New York: Pocket Book, 2000.
- Shields, David Shane, Salerno. *Salinger*. London: Simon & Shyster, 2013.
- 須賀敦子 『須賀敦子全集』 第 6 卷。東京：河出文庫, 2000.